

江戸期における音楽 一節切尺八の復活をめぐる

加藤 いつみ

<摘要>

一節切尺八は、室町から江戸中期にかけて盛んに吹かれた竹を素材とする縦笛である。この笛は、僧侶、武士、連歌師、公家、天皇など多くの人によって吹かれ、その記録が絵、俳諧、日記、歌の中に残されている。また 17 世紀初には一節切の専門の楽譜書が成立している。さらに、今日においてもかなりの数の楽器が現存していることから、当時は盛んに吹かれていた事が窺われる。そのような歴史をもつ笛であるが、17 世紀中頃に流行した三味線や（虚無僧）尺八の登場により、一節切は影を潜めた。しかし、21 世紀初になって復活の兆しが見られ、笛の愛好者によるグループ活動なども全国的な繋がりをもち始めた。現在は、全国の愛好者が集まって二年毎にコンサートを開くなど、その輪が広がっている。本研究は、この笛の足跡をたどることにより、その歴史的な価値を認識し、復活につなげる方法を考察しようとするものである。

キーワード：音楽、一節切尺八、歴史、生涯学習、復活

はじめに

尺八は、日本では大きく三種類に分けることが出来る⁽¹⁾。その（1）は平安初期まで雅楽で用いられた雅楽尺八、（2）は 16 末～17 世紀にかけて流行した一節切尺八、（3）は現在吹かれている虚無僧尺八（以下尺八と略記）である。一節切尺八（以下一節切と略記）と尺八は比較的楽器の構造、基礎理論が似ているが、雅楽尺八は音階構成、指孔の数といった面で二つの笛とはかなり異なる。その中で、筆者の研究対象は一節切である。

一節切は前側に 4 つ、後側に 1 つの指孔を持つ縦笛である。この笛は、絵、俳諧、日記、歌の中に登場し、また 17 世紀初には専門の楽譜書が成立している。そして、今日においてもかなりの数の楽器が現存していることから、当時は盛んに吹かれていた事が窺われる。そのような歴史

をもつ笛であるが、17世紀中頃に流行した三味線や(虚無僧)尺八の登場により、半音が出しにくく、音量の少ない一節切は影を潜めた。しかし、21世紀初になって復活の兆しが見られ、笛の愛好者によるグループ活動なども全国的な繋がりをもち始めた。現在は、全国の愛好者が集まって二年毎にコンサートを開くなど、その輪が広がっている。

本研究は、この笛の足跡をたどることにより、その歴史的な価値を認識し、復活につなげようとするものである。

I. 一節切に関する残された資料

復活を考えるにあたり、まず、この笛がたどった歴史について述べる。

一節切の歴史をたどるにあたり、現存する資料を次のような四つに分類し、各々の角度から見てゆきたい。

1. 絵画資料

- ① 「琵琶法師」の絵
- ② 龍潭寺屏風絵「遊楽之図」
- ③ 『糸竹初心集』にある絵
- ④ 北野社頭図屏風絵「棕政」印北

2. 文献資料

- ① 鳳林承章の日記『隔莫記』
- ② 柳沢淇園の随筆『ひとりね』

3. 一節切の譜書(楽譜書)

4. 現存する一節切の楽器

1. 絵画資料

② 龍潭寺屏風絵「遊楽之図」

① 「琵琶法師」の絵



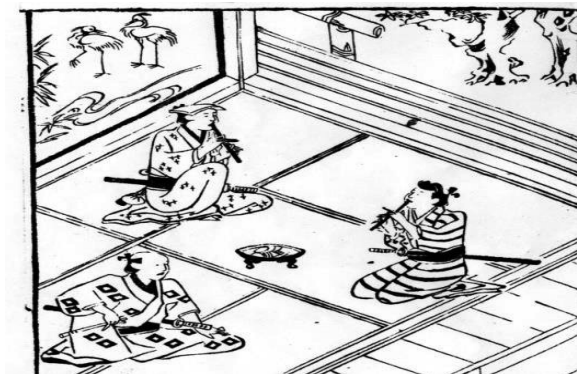
①は土佐光信が描いたという「七十一番職人歌合」（1500年末頃）の中に残された「琵琶法師」の絵である⁽²⁾。大衆芸能者である法師が描かれ、その膝元に一節切が置かれている。それは、節の数や指孔の数からして一節切だとわかる。この絵は、琵琶の調子を見るための調子笛として用いたのか、或いは何か曲を吹く為のものかはわからないが、一節切は16世紀末には存在していたことが窺える。

②は龍潭寺屏風絵「遊樂之図」である。ここでは踊りの様子が描かれ、一節切は三味線と共に描かれている⁽³⁾。そのことから、この笛は、17世紀には他楽器と共演していた事が見えてきた。一節切の奏者は、縞模様なむらそうの揃いの浴衣を身につけていることから既に職業芸能者が居たことも推測できる。また、家の中の縁側には、僧侶の横に二人の若者がおり、三人で一節切を吹いている。僧侶の右隣の若者は、寝そべて吹いているが、初心者はその方が音を出しやすいからであろうか。

③は1664年に版行された中村宗三著の譜書『糸竹初心集』しちくしょしんしゅう（上）に所収された絵である⁽⁴⁾。右側の若者は笛を吹き、手前の男性は歌い、そして真中で置き手ぬぐいしちくしょしんしゅうをしている男性は師匠ではないかと推測する。本来左手が上に来るのが基本であるが、この男性は右手が上になっている。それは鏡を見るように指使いを指導するためであろう。また、真中の男性は、その姿勢からして笛の伴奏で歌を歌っているように見受けられる。

④は、北野社頭図の屏風絵の一曲であり、一節切を聴きながら満開の桜の下で食事をする様子が描かれている。ここでは二人の若者と一人の僧侶が笛を吹いている。

③『糸竹初心集』より



④ 北野社頭図屏風「掠政」印北



四枚の絵からわかったことは、一節切はいろいろな場面で、年齢に関わり無く、若者・老人にも吹かれており、しかも吹いているのは男性であり、そして僧侶が多いことである。一節切は、龍潭寺屏風絵「遊樂之図」や北野社頭図屏風「掠政」に見られるように、野外での楽しみの中に用

いられているのは、音色、持ち運びの便利さ故であろう。

2.文献資料

<一節切に関する文献資料の一覧>

	分類	資料名
1	雅楽書	教訓抄(1233)、 體源鈔 (1512)
2	日記	看聞御記 (1425)、 宗長日記 (1522-27)、隔莫記 (1635~68)
3	随筆	ささめごと (1463)、ひとりごと (1468) ひとりね (1724)、雅游漫録巻五～洞簫辯～ (1786)
4	漢詩・漢文集	狂雲集 (15世紀中頃)、狂雲詩集 (15世紀中頃) 林羅山文集-餘音尺八記- (1625)
5	和歌	誹風柳多留 (1764)、黄葉和歌集 (1699)
6	歌謡集・謡曲集	「隆達節唱歌」90 (16世後半)、松の葉(1703)、閑吟集(1518) 田植草紙(14-15世紀)、夜討曾我 (1629能で演じる)
7	仮名草子、浮世草子、 読本	西鶴諸国ばなし「不思議のあし音」(1685)、日本永代蔵「才覚を 笠に着る大黒」(1688)、春色梅児誉美 (1833)、春色辰巳園 (1833) 仁勢物語 (1624-44)、風流志道軒伝 (1763)
8	歴史書	古事談 (1212-15)
9	百科事典	和漢三才図会十八 (1712)、 嬉遊笑覧 (1830)

次に(2)文献資料を見てみよう。

一節切は、多くの書には「尺八」として記述されている。従って元の書に一節切を尺八と表記してあれば、それを受けて尺八とする。多くの書が尺八と書かれているが、一節切という名もま
るでないわけではない。この笛を一節切と言った最初的人是高三隆達(1527-1611)であった⁽⁵⁾。
彼は自分の歌の中に「尺八の一節切こそ音もよけれ、きみと一夜は寝もたらぬ」と詠み、一夜と
一節切の一節を同音異義語して洒落て用いている⁽⁶⁾。この使い方が一節切と言う言葉が用いら
れた最初である。当時は(虚無僧)尺八が存在していなかったから「尺八」でよかったのであろう。
しかし、(虚無僧)尺八が出現し始めると、どちらの尺八のことを指すのか迷いも生じる。

上記の<一節切に関する文献資料の一覧>の中から、②の日記である鳳林承章の『隔莫記』、
③の随筆である柳沢淇園の『ひとりね』の二つの資料に絞り、その中から江戸期における楽器と
しての一節切、その普及の仕方、用いられ方について述べる。その記述を通して当時の人々の生
活の一部が見えるのではないかと考える。

① 鳳林承章の日記『隔莫記』

『隔莫記』は、京都鹿苑寺と相国寺の住持を永年務めた鳳林承章(1593~1668)の日記である。

鳳林は、最初の日記『日用集』によれば、慶長十六年（1611）八月二十日、十九歳（1612）の年で鹿苑寺の二代目の独住となり、また、寛永二年（1625）三十二歳の折、本山相国寺の九十五世住持になっている⁽⁷⁾。『隔蓑記』は、寛永十二年（1635）の8月24日から死の2ヶ月前の寛文八年（1668）6月28日までの33年間に亘った日々の出来事が書き綴ってある。その中には尺八に関する記述が67箇所見られた。筆者は、赤松俊秀編の『隔蓑記』⁽⁸⁾を底本として「尺八」に関する記述を抽出した。鳳林は後水尾天皇と縁戚関係にあり⁽⁹⁾、高い教養を備えた僧侶であった事から、五撰家、公家などの宮廷の人々、林羅山など多くの知識人との交友があった。日記の中には、後水尾院が一節切にいたく興味を示された記録なども残されており、庶民楽器である一節切が天皇・貴族の生活の中にも入り込んだ事を伺い知る事ができる。

鳳林が住持を務める相国寺には、壽恩（原是齋）という尺八の上手な僧侶が居た。鳳林は度々彼に尺八の演奏を頼んでいる。壽恩が初めて後水尾院に呼ばれて吹いたのは、慶安五年（1652）三月十六日、瓢界御殿において賭け事の場が持たれた後の席である。

内々依仙洞之仰、而今晩、於瓢界、而壽恩尺八被為 聞召也。壽恩・壽眞・元秀三人召寄、吹尺八也。（中略）五調子共三人連吹、其後一人充吹、其後吹乱曲也。

後水尾院から、壽恩の演奏を今晚聞きたいから連れてくるようにと鳳林に突然依頼があり、鳳林は急遽壽恩の元に駆けつけ、壽恩・壽眞・元秀の三人を連れて瓢界御殿に赴いた。そこでは、院をはじめ公家達が壽恩達の演奏を聴いた。彼等は、五調子を三人で一緒に吹き、その後に独奏、そして乱曲（流行歌）⁽¹⁰⁾を吹いている。どんな乱曲が吹かれたのか分からないが、当時はやっていた「吉野の山」「ころく」などの歌を吹いたのではなかろうか。また、後水尾院は承応三年（1654）五月二十五日にも壽恩たちを瓢界御殿に呼んでいる。さらに、明暦三年（1657）四月十五日、鳳林は、壽恩の製作した尺八を院に献上している。院は格別なご機嫌で、尺八を夕暮れまで楽しまれた様子が記録されている。また、萬治三年（1660）九月二十五日、院は、壽恩から贈られたお気に入りの尺八に樺を巻くように鳳林に申し付けられた。樺を巻いた完成品が壽恩より届いたのは、萬治三年（1660）十月九日であった。翌日、鳳林はその笛を持って仙洞御所へ届けることになっていたが、約束の時間に遅れて、院の使が相国寺まで迎えに来る羽目になった。院は笛の出来上りを楽しみに待っておられたのであろう。これらの記述から、院の尺八に対する並々ならぬ愛着を感じ取ることが出来る。このように院は、瓢界御殿においてお遊びの際には、二度も壽恩とそのグループの演奏を聴く事を望まれ、ご自身も何本かの尺八を所有されているところから、かなり尺八に興味を示されたようである。この記録から、庶民楽器である一節切が身分の高い人達の間でも吹かれていた様子が窺える。

② 柳沢淇園の随筆『ひとりね』

著者の柳沢淇園（1703-58）は、江戸中期の武士、文人画家、漢詩人であり、日本文人画（文人が余儀として描いた絵画）の先駆者とされる。柳沢淇園は、随筆『ひとりね』（1724）⁽¹¹⁾に

当時の一節切の流行の様子を詳しく書いているので、その記述から 18 世紀初期の一節切の普及の実態を知る事が出来る。

大もり宗勲・是齋・宜竹・安田城長・横田一音・同傳竹・宗左老人など、此道にくは敷もの也。(中略) 手巾・小兒しゆきん こちごなど面白し。小兒には「さらばのねとり」といふ習ならい有と也。山寺の兒ちごに恋慕して、此手ふきいだを吹出したるとなり。「さらば明日まいらふ」といふ音ねとり有となり。朝倉あさくら なみま、波間のたぐひ、おびたごしう手あり。(中略) 余にも「稽古せよ。おしえて遣すべし」といふ。余は、齒の毒なれば、是を習わず。(中略) 薩摩国の禪宗に幸雲といふ人あり。至極尺八に妙有。七ツ八ツの年より好きて吹くに、師匠の僧、学問のさまたげに成事を厭ひて、堅く尺八を吹事をいましむ。此故に、夜々墓原に出てこれを吹、雪にふりこめらるゝを知らぬ事有し程の由也。

淇園が知っている一節切の名手として大森宗勲・是齋・宜竹・安田城長・横田一音・同傳竹・宗左老人などを挙げ、曲として「手巾」、「小兒」、「朝倉」、「波間」そして「さらばのねとり」などのたくさんの曲を列挙しているので、当時の人はこの種の曲を吹いていたことがわかる。しかし、大森宗勲・是齋・宜竹・安田城長・横田一音・同傳竹迄はその存在が分っているが、一節切の祖と云われている宗左老人について不明な点が多い。また、淇園がはっきり曲名を明記したことにより、江戸期の人が吹いた曲を知る事ができた。そしてまた、一節切を吹く事が齒に悪いと思っていた人が居た事、禅僧・幸雲のように、薩摩国の遠隔の地にあっても吹いていた人が居た事を記す貴重な記録である。

3. 現存する一節切の譜書(楽譜書)

17 世紀初～18 世紀初にかけて多くの一節切の専門書が成立した。それらの書を譜書と呼ぶ。列挙すると次のようなものである。

- ①『短笛秘傳譜』慶長十三年(1608) 蚩菴 太秦昌名所持 宮城道雄記念館蔵
- ②『短笛秘傳譜』享保九年(1724) 閏四月中旬写之 岡遠州江守太秦昌名、東北大学蔵 狩野文庫本
- ③『律呂并洞簫鈔』慶長十四年(1609) 孟春吉辰 宗勲居士 嶋津陸奥守家久尊公 神田俊一蔵
- ④『宗左流尺八手数并唱歌目録』元和八年壬戌 夏五吉日(1622) 陽明文庫蔵
- ⑤『尺八相伝集』寛永元年甲子(1624) 夏五吉辰 蚩菴 東北大学蔵 狩野文庫本
- ⑥『尺八手数目録』寛永元年甲子(1624) 夏五吉辰 蚩菴 居士宗勲在判 内閣文庫蔵
- ⑦『一節切尺八笛傳授』寛永元年甲子(1624) 夏五吉辰 蚩菴 宗勲 静嘉堂文庫蔵
- ⑧『尺八手数唱歌之目録』寛永貳年(1625) 五月吉日 大森宗勲在判 静嘉堂文庫蔵
- ⑨『糸竹初心集』中村宗三 寛永四年(1664) 刊 甲辰卯月吉日 寺町通 秋田屋五良兵衛版 岡本聡蔵(アカキ文庫旧蔵)
- ⑩『洞簫曲-ひとよ切-』明暦三年(1657) 四月壬寅 巖嶋暫居賤所穰家注記 大坂住 村田宗清

(跋文)

寛文九年（1669）巳酉初冬吉辰 秋田屋五良兵衛版行 国会図書館蔵

- ⑪『尺八手数并唱歌目録』原是齋著（跋文） 天和元年（1681）辛酉十月十五日 木村三郎左エ門 道貞 在印 桂宇エ門殿 明暗寺蔵
- ⑫『紙鳶』貞享四年（1687）山本五兵衛版、元禄五年（1692）（跋文）、元禄十二年（1699）刊 岩瀬文庫蔵
- ⑬『宗左流尺八手数並唱歌私之目録』延宝三年（1675）指田傳兵衛尉義陳 東京芸術大学附属図書館蔵
- ⑭『尺八秘傳録』正徳五（1715）乙末年七月中旬書之、東京芸術大学附属図書館蔵

一節切に関する譜書は、17世紀初の名手である大森宗勲によって書き表わされた『短笛秘傳譜』を始めとして、多くが残されている。また版行された書もある⁽¹²⁾。①から⑧までは、大森宗勲によって書かれたものである。その内容は、①の『短笛秘傳譜』が基礎となり、ほとんど踏襲されている。一冊の譜書は、五調子の中に 60 手ばかりの短い曲が収められている。その中には柳沢淇園が『ひとりね』で書いているように「手巾」、「小児」、「朝倉」、「波間」そして「さらばのねとり」などがある。

一節切の音階構造は、現代の七音音階と異なって、以下に示したように双調、黄鐘調、杓越調、平調、盤渉調の五種類の音階から成り、双調は G 音、黄鐘調は A 音、杓越調は D 音、平調は E 音、盤渉調は H 音がそれぞれ主音となる。

五音音階

双調 黄鐘調（呂・律混合） 杓越調

双 黄 盤 杓 平 黄 盤 杓 平 下 杓 平 双 黄 盤

長三度 短三度 長三度 長三度 左に同じ 左に同じ

律音階

平調 盤渉調

平 双 黄 盤 上 盤 杓 平 下 免

短三度 長三度 長三度 長三度 左に同じ

当時吹かれた曲は、柳沢淇園が『ひとりね』で書いているように黄鐘調（筒音を A 音とする）曲が最も多く、皆短い曲である。それが一節切の音階であるフ・ホ・ウ・エ・ヤ・リの譜字で書かれている。その文字から音の高さは把握する事ができるが、長さに対する指示はされていない。現在は、基本的には一文字を一拍として吹いているが、昔もそのように吹かれていたのか、更な

る研究が必要である。

4. 現存する一節切

日常において一節切を見たり触れたりすることはほとんどできないが、楽器を所有している寺院や博物館また個人の愛好家は全国に亘っている。研究者の中には200本以上の一節切の存在を確認している人もいる。筆者は、2008年から2020年にかけて全国の寺、博物館、個人宅を回って49本の一節切の調査を試みた。下記の〈現存する一節切一覧〉のとおりである。ここに書かれている銘とは楽器につけられた愛称、焼印は製作者が楽器に付けた焼印、製作者は楽器を作った人、調査日は筆者が調査した日あるいはデータを入手した日、管長は管全体の長さ、管尻内径は管尻（管下の内側）、所蔵は所有者を示したものである。調査にあたってはもっと詳細な計測を試みたが、紙面の都合上、下記のようにまとめた。

〈現存する一節切一覧〉

No	銘	焼印	製作者	調査日	管長(纏)	管尻内径	所蔵
1	声			2008 4/18	33.4	1.75	岩倉市船橋楽器資料館
2	清音	森		4/18	33.6	1.85	同上
3	夕時雨			4/22	33.5	1.80	彦根城博物館
4	鳳吹		大森宗勲	5/23	33.4	1.78	名古屋市昭和区興正寺
5	無銘			5/23	33.8	1.80	同上
6	まむち			6/6	33.8	1.78	岡崎市本宿町法蔵寺
7	獨熨			7/3	33.3	1.85	東京都新宿区法身寺
8	古里			7/3	33.5	1.90	同上
9	故郷			7/3	33.4	1.95	同上
10	指田	指田	指田	7/3	29.8	1.70	同上
11	晴風			7/3	33.6	1.95	同上
12	友之	宗摺	大森宗勲	7/3	33.9	1.80	同上
13	浅みどり	㊦	原是齋	7/3	33.2	2.00	同上
14	秋声			9/20	32.7	1.80	諏訪市 貞松院
15	龍吟	㊦	原是齋	2011 9/23	33.0	1.50	飯田勝利
16	頻伽	㊦	原是齋	9/23	33.8	1.80	加藤いつみ
17	無銘			2013 7/1	31.6	1.60 1.40	京都府京田辺市 酬恩庵
18	無銘			7/1	34.6	1.70	京都市北区大徳寺 芳春院
19	凝雲		大森宗勲	2015 9/22	33.8	1.80	相良保之

【査読論文】江戸期における音楽

20	無銘			9/30	33.7	1.80	津島市 大橋家
21	無銘	法橋宜	宜竹	10/1	33.5	1.75 1.85	神田可遊
22	嘯月	岫	大森宗勲 ?	10/1	33.0	1.80	神田可遊
23	碧雲 螺鈿	⊕	原是齋	10/1	33.9	1.80	神田可遊
24	無銘	小竹組 一思	神谷潤亭	10/1	30.9	1.60	神田可遊
25	無銘			2016 4/1	33.8	2.00	大釋真砂俊
26	無銘			2016 4/25	33.3	1.90	東京都新宿区法身寺
27	不傳		宗措	同	33.4	1.80	東京都新宿区法身寺
28	山風	⊕	原是齋	同	33.5	1.90	東京都新宿区法身寺
29	寢覚			同	33.8	1.60	東京都新宿区法身寺
30	𩇑	山中		同	34.0	1.60	東京都新宿区法身寺
31	堂	法橋	宜竹	同	30.2	1.50	東京都新宿区法身寺
32	空蟬			同	34.0	1.70	東京都新宿区法身寺
33		⊕		同	34.0	1.60	東京都新宿区法身寺
34	紫	⊕		同	31.0	1.70	東京都新宿区法身寺
35	龍吟			同	33.9	1.90	東京都新宿区法身寺
36		⊕		同	33.5	1.60	東京都新宿区法身寺
37	手枕			同	33.8	1.60	東京都新宿区法身寺
38	竜吟			同	33.3	1.70	東京都新宿区法身寺
33				7/11	34.9	1.65	熱田神宮宝物館
40	無銘			12/7	33.5	1.70	酒井松道
41	乃可勢			2017 8/21	32.7	1.80	長野県諏訪市 貞松院
42	山風		大森宗勲	2020 2/4	33.2	1.40	国立歴史民俗博物館
43	天女蓮華蒔 絵			同	33.0	1.30	国立歴史民俗博物館
44	龍吟			同	33.5	1.20	国立歴史民俗博物館
45	小田蛙			同	33.2	1.40	国立歴史民俗博物館
46	鬘鏡			同	33.5	1.50	国立歴史民俗博物館
47	紫鸞	⊕	原是齋	同	33.3	1.60	国立歴史民俗博物館
48	竹葉			同	34.0	1.80	国立歴史民俗博物館
49	小簫			同	36.7	1.60	国立歴史民俗博物館

筆者が測定した 49 本から、(No6)「まむち」、(No7)一休笛、(No8)「頻伽」の一節切を挙げる。

(No6) 銘「まむち」は、岡崎市本宿町法蔵寺が所蔵している。この笛は、家康の父・松平広忠

公が幼い家康に贈ったものである。家康は、6歳の折に今川家に人質として旅立つにあたり、この笛を寺に残したその笛の裏側には 鬮擷収（松平桑の葉を摘み取って収める）と推量できる落書きが小刀でされている。頭部がやや曲がっており、金文字で「まむち」と銘が入っている。

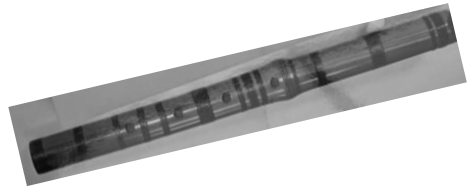
(No7) 一休笛は、京都府京田辺市酬恩庵所蔵の笛で、一休禪師が愛用したと言い伝えがある。やや小ぶりで、赤茶色した光沢のある美しい笛である。吹かせてもらったところ、かすかに音が出た。(No8) は筆者所有の笛である。原是齋によって製作され 是と焼き印が入り「頻伽」と金文字で銘の入った美しい笛である。原是齋は、前記したように後水尾院の前で演奏をしたり、笛を献上する程の一節切の名手であった。楽器を入れた袋もあるが、その材質は絹で鳳凰が織り込んである。江戸期のものではないかと推測する。美しい笛であるがよく吹かれたのか、歌口がやや変形している。以上、49本の笛の内三本についてその特徴を述べた。そこから以下の事が見えてきた。

① 49本のうち39本に銘が入っている。銘とは、ただ楽器としての役割以上に愛玩楽器あるいは家宝としての意味があったのであろう。由緒書きが入っていたり、箱の表蓋に和歌が書き込まれている笛もある。中でも No3 の彦根城博物館所蔵“夕時雨”は見事な笛であり、「夕時雨 飛登へ幾里」と表書された桐の箱に収められ、その中に「飛登よ切 壺管 右古傳竹作 裏ニ印有之 表之銘並箱之蓋ニ本歌共ニ村井春昌筆」と覚書が添えられている。

(No6) 銘 「まむち」
33.8 糎



(No7) 一休笛
31.6 糎



(No8) 銘「頻伽」と袋
33.8 糎



現存している楽器は17世紀のものが多い。多くの笛が捨てられたり、燃やされたりした中、大森宗勲や原是齋の 是と と言う巨匠の作った笛は大切に保存されてきた。筆者の調査の中にも宗勲作と思われるものは5管、是齋は6管ある。これらの笛は、当時の華やかな文化を我々に伝え

る架け橋となっている。

②現存しているのは 33.3～34.0 種の長さの管が多い。この長さの管を黄鐘管と呼ぶ。この管が 42 本あり、全体の 8 割以上に相当する。一節切には長さの異なる五管⁽¹³⁾があったが、普及するにつれて黄鐘管のみ残った。他の管も使われたであろうが、その数は少ない。当時においては、黄鐘管が一般的であり、一節切とは、黄鐘管を指す言葉として用いられた事がわかってきた⁽¹⁴⁾。

以上、筆者の収集した資料から、1. 絵による資料、2. 文献による資料、3. 一節切の譜書(楽譜書)、4. 現存する楽器に分けて、その特徴、歩んだ道、歴史的な価値について述べてきた。これらの資料を通して江戸初期に於ける一節切の普及の仕方、用いられ方、そしてそれを通して当時の人々の生活の一部が見えてきたのではないかと思う。その上で、時代の変遷と共に歩んだこの笛の歴史的な重みを受け止め、今後の復活に結び付けていきたいと考えている。

おわりに

筆者は、名古屋経営短期大学に勤務していた 2010 年、「生涯学習における一節切(ひとよぎり)尺八の楽しみ～大学連携講座の実践を通して～」として一般市民に向けて公開講座を試みた。講座は 5 回に分けて組み、そのうち 1 回目はガイダンスと一節切の概要説明。楽器製作は 2 回目から。3 回目から出来た笛を使って音を出し、フ・ホ・ウ・エ・ヤ・リ・ヒの一節切の音階練習に入った。4・5 回は実際の演奏に取り組み「ほたるこい」を吹く練習を試みた。

一節切は現在の尺八の前身楽器であるが、その名を知る人もほとんどいない今日、この楽器製作にどういった人が何の目的で参加するのか、その人たちはどんな音楽の学びをしてきたのか、楽器の選択に男女の相違があるのか、などの参加者の音楽的なバックグラウンドについて興味を覚えた。これらの質問をアンケート形式で尋ねた。工具を使用したりする作業ではあったが、参加者は男女半々であった。その年齢は男性 40-70、女性は 40-60 歳であった。女性は、ピアノ、オカリナなどの楽器を奏することのできる人が多かった。やはり音楽経験(特にオカリナ)が参加を後押ししたのであろう。参加者には男女の差はなく、いずれも楽器製作を楽しいものと考えている人が多かった。竹の太さによる違いがあるので、皆ピッチが揃うことは不可能であるが、すべての受講者がどうにか 1 音か 2 音を出す事が出来た。中には「ほたるこい」も何とか音が出た人もあった。講座終了後、邦楽器の魅力が高まったと答えた人、その後、現在まで学習を継続させている人もいる。

以上、「大学連携講座」参加者の音楽的なバックグラウンド、講座の内容、楽器製作、音出しについて述べ

たが、最近、古い物に興味を示し、一節切を始めた若者もあらわれ始めた。また、近年、全国の一節切の愛好者が集まって、2 年毎に持ち回りコンサートを開催している。その会場で、筆者は某大学の学生さんと「とうりゃんせ」、「荒城の月」の二重奏を披露した。小学生の児童もソロで「千本桜」を演奏した。一節切は陽音階⁽¹⁵⁾から成る楽器なので、演歌やポップスなど半音を含

む音楽を吹くにはあまり適していない。そこで、一節切の音楽交流としては、「ほたるこい」、「こきりこ」等のわらべ歌を中心に曲選びをすることが大切である。また、その教材に手を加えて二重奏などに編曲し、お互いのメロディーを聴き合って奏するような方法をとっていくことが交流につながり、楽しめるコツではないかと考える。一節切は、歴史を持った楽器であるところから、ただ単に演奏を学ぶのみならず、楽器を通して日本の文化に関心を持つきっかけにもなりうる。ゆっくりとしたペースで機会があるごとに演奏を聴いたり披露したり、また、楽器製作の講座等への参加を促し、理解と関心を広め、学習を継続させていく事が今後の復活に繋がるのではないかと考えている。

注

- (1) 上参郷祐康氏は、『糸竹論序説』私家版 平成七年(1995) P68 では、この他に天吹と多孔尺八を挙げているが、これらは、狭い地域で吹かれた笛であったり、短期間で廃れてしまったので除外する。
- (2) 「琵琶法師」は、『七十一番職人歌合』の 25 番に描かれている。新日本古典文学大系 61 岩波書店刊行 1993 年 3 月 発行。
- (3) 龍潭寺は、静岡県浜松市北区引佐町にあり、733 年に行基菩薩によって開創された古刹である。この寺には、紙本金地着色の六曲一双の江戸後期の屏風があり、その一枚が「遊楽之図」である。
- (4) 『糸竹初心集』は中村宗三が書いた著であり、1664 年(寛文 4)、京都寺町通、秋田屋九兵衛(五良兵衛となっている版もある)刊行している。近世邦楽の楽譜公刊本としては最古の資料であり、17 世紀の日本音楽の実態を知るためには欠かすことのできない貴重な文献である。
- (5) 高三隆達(1523-1611)は、安土桃山～江戸初期にかけての日蓮宗の僧であり、書道・連歌・音曲などに非凡な才能を発揮した。諸種の音曲を折衷して独特の隆達節を創始し、庶民の間に流行らせた。
- (6) 日本古典文学大系 44 浅野健二校注 岩波書店 1959 年『隆達唱歌』90 番。
- (7) 鳳林は、鹿苑寺と相国寺の境内にある晴雲軒に住み、輿に乗って二つの寺を行き来していたのである。岡佳子編「寛永文化のネットワーク『隔莫記』の世界」 思文閣出版 平成十年(1998)。
- (8) 本稿では『隔莫記』赤松俊秀編、鹿苑寺発行昭和三十四年(1959)を底本として用いた。
- (9) 鳳林は、後陽成院とは従兄弟の関係であり、後水尾院は後陽成院の子であるから従兄弟の子、従甥(じゅうせい)となる。
- (10) 「乱曲」というに言葉が最初に使われたのは、「紙鳶」下巻「一節切起」である。ここには
あまたの吹手蜂起せりされども手にくわしくして乱曲にうとく、あるひとは乱曲に鍛錬して手におろそかなるやまひをまぬかれず・・・
と、あり乱曲とは流行歌の事を指している。
- (11) 『ひとりね』中村幸彦校注 日本古典文学大系 96 近世随想集 岩波書店 1965 年。
- (12) ⑨『糸竹初心集』は秋田屋五良兵衛、⑩『洞簫曲・ひとよ切』は秋田屋五良兵衛、⑫『紙鳶』は山本五兵衛によってそれぞれ版行されている。
- (13) 五管とは、双調管、黄鐘管、老越管、平調、盤渉管である。

【査読論文】江戸期における音楽

- (14) 『糸竹初心集』の中に「節を一つ込め、長さ一尺八分に切故、此の名を付けるという。」という記述がある。長さ一尺八分（約 35 cm）は黄鐘管の長さであるから一節切とは、黄鐘管を指す言葉として使われた。
- (15) 陽音階とは、半音を含まないド・レ・ミ・ソ・ラのような音で成っている音楽である。

加藤 いつみ（元・名古屋経営短期大学子ども学科 教授）

